

トメ・ピレス 東方諸國記（大航海時代叢書V）

生田滋・池上岑夫・加藤栄一

・長岡新治郎譯注

昭和四十一年十月 岩波書店

A5判 六二二頁 圖版二葉

ポルトガルは一五一〇年にゴアを、翌年にはマラッカを占領して、インド洋に於ける通商權を確立した。本書の著者 Tome Pires は、かくポルトガル王國の海外發展の最盛期にインド在任の商館員として、マラバル海岸港市カナノールに赴いた。その當時彼は四十五歳前後であつたらしいが、翌一五二二年の六・七月頃にマラッカに移り、同地の商館の書記兼會計係及び香料管理役の職に就いた。彼が王子アフォンソ付の藥劑師、リスボンで香藥の取引をやっていた經歷によるものと思われる。

マラッカに勤めていた間に、彼はジャワ・スマトラ島の沿岸各地を訪れたが、一五一五年の二月末に、歸國を決意してコチンに戻つた。ところが、大航海時代という進取の氣風に富む時代に生き、愛國心の強かったピレスは、新任のインド總督からポルトガル王國最初のシナ派遣大使に任命されたために、勇躍シナへ赴くことになつた。かくしてピレス等のポルトガル使節一行は翌年八月に廣州港外に達したが、ピレス等の中國官憲との交渉經過、及びピレスに對す

る處遇については、夙に矢野仁一氏の《支那近代外國關係研究》によつてよく知られているので省略する。とにかく、豫期せざる事件によつてピレスは中國で獄死、又は客死した（一五二四年、或は一五四〇年頃）。

生田氏の解説によれば、本書はピレスがカナノール、マラッカ在職中に得た情報に基づき、一五一五年一月以前に執筆された未整理の草稿とされる。本書がかく一商館員の著した遺稿のために、歴史が常に強者の記録である如く、ポルトガル人の手に成る最初の東洋に關する記述としての價值は、近頃まで黙殺されていたのである。同國の地圖學者 Armando Cortesão は、一九三七年に本書の寫本がパリ國民議會圖書館所藏の Francisco Rodrigues の《水路誌》と合綴されていることを發見した。コルテザンはこの寫本と水路誌を英譯すると共に、寫本の原文を付して、一九四四年に有名な Hakluyt 協會叢書に二冊本で刊行した。彼の紹介によつて本書は一躍歐米のインド・東南アジア史研究者から注目されるようになったが、我が國では Hakluyt 本が稀觀書になっている現状なので、本書の原文からの和譯が刊行されたことは誠に喜ばしい。殊に、英譯本には見られない漢文史料との比較が隨所に示され、我が國では利用しにくいポルトガル語史料の關係記事が本文注・補注として豊富に譯出されていて、この譯書の利用價值を大いに増している。また附録 (pp. 449-546) には、インドのマラバル地方とそのカストについて現在でも史料的高い《Livro de Duarte Barbosa》のその總論部分が全譯されている。更に、地圖・挿繪が多數收録され、本文の理解を助けている。つまり、この譯書が一種の史料集として使用できるように配慮されていることを特記しておく。

本書はそのフルタイトルを「紅海からシナ人〔の國〕までを取扱うスマ・オリエンタル」という。コルテザンによれば、このヘスマ・オリエンタル即ち東洋の記述は十六世紀前半の東洋に關する最も重要で完全な記録とされる。だが、發見者や記録者が自己の取扱う對象を誇張するのは古今不變の作者心理であるから、彼の評價や著者の氣負った題名も若干割引して聞く必要がある。即ち、その記述範圍は著者が序文で述べている如く、馬拉ッカを中心とする東西海上通商圏とその關係地域に限られている。また、その記述は藥劑商、商館員としての觀點に立つた商業取引面に重點がおかれている。従つて、マライ半島やインドネシアの當時の情勢を解明するのに不可欠の史料であるが、また東南アジア各地の當時の社會體制・風俗・回教勢力の意義やアジアの取引形態を研究するのに恰好の資料と言えるが、著者が任地馬拉ッカ、訪問地ジャワ・スマトラの力を過大視して、當時の東南アジアに於けるインドシナ大陸諸國の役割と、東アジアに占める中國のウェイトを過少評價しているさらいがある。それはとも角、著者が各地の政治的權力を握っている者にも關心を寄せている點で、更に貿易中心の記述とは言え、アジアに關する體系的な記録を遺したという面で、優れた性格をもっていることを認めねばならない。

原文には部・章の區別がないが、譯書の體裁を先ず略記してから、本文の内容を見ていこう。

## 解説

## 序文

## 第一部 エジプトからカンバヤまでの諸國

- 第二部 デカンからセイロンまでの諸國
- 第三部 ベンガルからインドシナまでの諸國
- 第四部 シナからボルネオにいたる諸國
- 第五部 スマトラから香料諸島までの諸島
- 第六部 マラッカ

附録「マラバル地方について」

## 補注

## 参考文献

第一部は、一、エジプトとアビシニア、二、アラビア、三、オルムズ、四、ペルシア、五、ナイタケ族とレスブテ族、六、カンバヤ王國の六章より成る。この部分は、カトリック教徒の常として、聖書の傳説を事實であるかの様に記した箇所も見られ、地理的區分も極めて曖昧で不正確である。

第二部も、一、デカン、二、ゴア、三、カナリ、四、ナルシंगा、五、マラバル、六、セイロンの六章より成る。第一章から第四章までの記述は甚だ簡單であるが、第五章に關しては相當立入った記述を残している。ピレスがカナノールの商館に勤めていた關係で、近隣地方の情報を入手しやすかつたからであらう。

以上、第一部 第二部に記された地域の殆どは著者が實際に訪れていないので、傳聞による誤記が多く敘述も簡略である。しかし、取引關係の記事は比較的詳しく正確である。この部分の不備を補なうために、本文注・補注でポルトガル語史料を中心として種々の歐文文獻が豊富に譯出されており、讀者にとって非常に好都合である。

第三部は、一、ベンガル、二、ラカン、ペグー、三、シャム、ビルマ、四、カンボジャ、チャンパ、コーチ・シナの四章に分かれ

る。第一章の「王國の繼承方法」(p.191)によれば、當時のベンガルでは王を殺した者は誰でも王位に就くことが出来たらしい。著者はその習慣を約八十年前にバサイ(スマトラ北部)から齎されたものと考えているが、現象の類似を以て相互の間に因果關係を設けるのは、人のよく陥る誤りであろう。第二章の「ラカン」は現在のアラカンに當るが、當時のビルマはこれとベグー、アヴァ及びトングー(後二者はピレスの言う Bema 王國)の四國に分かれていた。著者は、イラワディ河のデルタ地帯を占めていたタライン人(モン族)の王國ベグーを「今まで見知ってきた地方よりも肥沃で、ジャオア(ジャワ)とはほ同じくらいである」と記し、同國の商業や盛んな外國貿易について可成り詳しく述べている。第三章に現れる「シアン王國」とは、當時メナム河下流域を中心に榮えていたアヌタヤ王朝(暹羅國)のことである。ピレスはここでシヤムの華僑に言及し、取引・關稅面でシナ人を優遇していることを指摘し、「シアン人がマラカに來なくなつてからの期間」を二十二年間と見なした。マラッカは十五世紀初期に明朝の權威をバックに、名目上シヤムから獨立したが、同世紀の後半になるとシヤムのマライ領を蠶食するほど強國となつた。シヤムとマラッカとの抗爭については、第六部の第一章(マラッカの)歴史で詳述されている。第四章に記された「カンボジア王國」は、有名なアンコール・トム、アンコール・ワットを建てたクメール人の國家であるが、十五世紀初めからシヤム人と著者の言う「カウシ・シナ王國」(ヴェトナム人の黎朝)の兩方から壓迫されて急速に衰え、十五世紀半ばには首都をブノン・ペンに移していた。従つて、著者もカンボジア王國については僅かししか語っていない。インドシナ大陸にインド文化の花

を咲かせたかつての強國にもう一つ、チャム人のチャンパ王國がある。この國は、著者の「カランバック」に關する記述に見られる如く、豊かな沈香と、中繼貿易によつて繁榮をはこつていたが、次第に南下するヴェトナム人の勢力に押されて、十五世紀後半には中部ヴェトナムを追われた。ピレスの語る「ジャンパ王國」はヴェトナム南部の Binh Thuan に逃れて餘命を保つていた小政權を指す。なお、著者の言う「カウシ・シナ王國」は、交趾(東京)地方を中心とした黎朝を意味し、最近までヴェトナム南部の一地域を指して呼ばれていた「コーチ・シナ」(交趾支那)とは異なるので、注意を要する。

第四部は、一、シナ、二、琉球、日本、三、ボルネオ、ルソンの三章に分けられる。第一章は、一五一三年にマラッカの司令官が廣東へ派遣した Jorge Alvares 一行の持歸つたシナに關する情報と、マラッカで蒐集した材料を基に記されたらしい。しかし、傳聞による記述のために、また自國の文明に對する誇りも加わつて、「シナの事柄は、國土・人民・富・奢侈・盛儀においてすべてが壯大である。その他の物語もそれがシナのことと考えるよりも、われわれのポルトガルのことと考えた方がより眞實味を持つている」(p.231)と語り、明朝が外國人の廣東入港を禁止したのはジャワ人やマラヨ人を恐れていたからであると、考えている。かく、著者が大國シナの事情をよく理解していなかったことは、次の言葉にも表れている。「しかし」それ(シナ)を征服するためには、われわれに服従したマラカの支配者は人々が言うほどの力を必要としないに違いない。なぜなら、かれらは脆弱な國民であり、征服しやすいからである」(p.240-41)。なお、傍點部分の譯文は一見誤解を招きやす

い。また、ピレスが國王の居住都市をカンバラ（カンバリック）と呼んだことに對する譯者の注（p. 234）も疑問である。第二章の「レケオ人の島」が今の沖繩（琉球）を指していたことは事實であるが、元代以前の漢文史料に現れた「琉求」が沖繩を指していたか臺灣を意味していたかは、一定しておらず、注意せねばならない。ところで「ジャボン島」についての敘述は甚だ簡單であるが、ポルトガル人の手による日本に關する最初の記録として注目されて良い。第三章は、前章同様、傳聞によっているので誤記が多く、記述も通一遍である。しかし、ピレスは、ブルネイの王が回教に改宗したのはごく最近でルソン人は殆どすべてが異教徒であると語っており、故田坂興道氏の説（ジャワ・ボルネオ回教史序説）（『東方學』第九號）と可成りくい違っている。即ち、同氏によればブルネイに回教が傳わったのは十世紀末頃で、ルソン方面にも十五世紀初めから回教勢力が及んでいたとされるが、氏の考證は漢文史料の零細な記事によつた、やや強引な推定と思われる。譯者は、同氏の見解をそのまま注で引用されているが（p. 252, 255）、まだ検討の餘地があるようだ。

第五部は、『大きく豊かで人口の多いサモトラ島およびその周圍にある島々の記述すなわち報告』と、『繁榮し誇り高く、豊かで堂々としたジャオアとスンダの島について、知ることのできる事柄の記述と報告』という二つの獨立した標題が掲げられ、著者自身の體驗と蒐集情報によつて記されているので、この地域に關する同時代史料が乏しい現在、第六部と並んで本書の出色部分と言えよう。

第一章スマトラでは、「パセー市」に關する記述が注目に價する。即ち、「パセー王國にはパセーと呼ばれる都市がある。ある人々は同市をサモトラと呼んでいる。全島でこれほど誇り高い場所はない。

いので、この島は當市の名で呼ばれるようになり、云々」と述べられている。パサイはインドから傳つた回教の東南アジアに於ける最初の足場であつた。マラッカが十六世紀半ばごろから東南アジアに於ける回教勢力のメッカとなるのも、マラッカの王がパサイ王女と結婚したことが大きく影響しているようで、著者はその點を第六部の第一章で詳しく語っている。また、彼の記述によれば、パサイに於ける回教の盛況はベンガル商人の力によるところが大きく、グジャラートからの影響を重視する從來の通説は再検討されねばならない。ところで、筆者の目にとまつたのは「水道をなしている島々の記述」（p. 236）で、ピレスの語る「リンガ島」がマルコポーロの旅行記に出てくる“Malayur”、汪大淵の『島夷志略』に見える「龍牙（犀角）」ではなからうかと考えている。第二章ジャワは、マジャパヒト王朝最末期の海岸港市の動靜を知りうる唯一の史料とされる。商業に詳しい著者は、パンタン及びグレシク港の重要性を説き、治安維持の良さを賞めている。即ち、二港は十六世紀後半からジャワ島に於ける外國貿易の中心地に發展するのである。更に、著者はジャワ人がその廣い領土を喪失するようになったマジャパヒト王朝の衰退—原因を鋭く指摘しており、その指摘は當時絶頂期にあつたポルトガル王室への警告でもあつた。ピレスはその他に、回教勢力がジャワ島沿岸地域に浸透していった過程を要領よく述べ、ジャワ社會に於ける言語使用の二重性をも正しく語っている。

なお、補注に收められた生田氏の「ジャワ王統について」（pp. 734-75）の論考は一讀に價する。第三章香料の島々では、バリ島、ロンボック島、スンバワ島、フロレス島についても若干觸れられているが、何と言つてもその中心はピレスがこの章の冒頭で述べてい

る如く、パンダ諸島にある。所謂香料諸島に、十七世紀以後ポルトガル、イスパニア、オランダ、イギリス人らの歐人同志のトラブルがもちこまれ、或は原住民達の抗争に乗じて彼らが惡辣な略奪をやつてのけ、原住民の生活を壓迫したことは近代の所謂植民地主義の先例であろう。それ故、ポルトガル人の來航がパンダ諸島の住民を幸福にさせ、回教徒商人の搾取を除いて彼らの生活を向上させたというピレスの見解は、我田引水の觀というよりも寧ろ、現今のヴェトナムに對するアメリカの態度と相通するものがあり、キリスト教徒の惡しき獨善と言えよう。第四章中央の島々とは、現在のボルネオ島・セレベス島・マドウラ島を指しているが、「マカサル諸島」(セレベス南部)の海賊と彼らによる奴隸取引の記事(pp.373-74)が面白い。インドネシアに於ける海賊の横行と奴隸貿易の一般性については、この部のしめくりである「あらゆる島々についての報告」という所で要約されている。

第六部は、一、歴史、二、支配地域、三、政治、四、貿易、五、ポルトガル人による占領の五章から成る。この第六部は、その記述内容、記述分量から言っても、本書の壓巻である。因に、マライ研究の第一人者とされる R. Wintelt 氏は、「本書はマライのスルタン時代に於けるすべてのポルトガル文獻の中で、最も重要な書である」と重視している。同氏の舊著「マライ史」(一九三五年初版)も、本書の出現によつて改訂版(一九六二年)で可成り書き換えが行なわれたのである。この譯書でも、補注に生田氏が『瀛涯勝覽』や『海語』の滿刺加の條を全譯されており、またポルトガル語の重要史料から同地に關する記事が抄譯されている。更に、「マラッカ王國について」(pp.584-95)という同氏のすぐれた勞作がこれま

た補注に收められており、本書の譯注責任者である生田氏の並々ならぬ配慮が窺える。即ち、この方面の研究に非常な便宜が與えられたのである。

生田氏は、マラッカの建設者パラメスワラを『明實錄』等に見える拜里迷蘇刺と同一人物と考えられたが、もしそうならば彼はマラッカ國王として最初に明朝へ赴いたことになる。だがピレスやアルブケルケの記録では、明朝に朝貢したマラッカの最初の王は彼の子のシャケンダルシャーとされる。また、同氏はパラメスワラは一四一三年頃まで在位していたとされるが、ピレスやアルブケルケの記述ではマラッカを建設してから三・四年で死去したと推定できる。これら二點の相違が前掲の論考では全然觸れられていない。更に、現地語史料としては第一級の『スジャラ・ムラユ』(馬來編年記)の記録に見える諸王の統治年數若くは年齢について、殆ど考慮されていないのは、遺憾である。成程、『スジャラ・ムラユ』は傳説とフィクションに飾られた文學作品であるかもしれないが、歐米の學者が一概にその史料の價值を輕視しているのには疑問がある。ところで、『スジャラ・ムラユ』に見えるマラッカの第四代のラジャ・イブラヒムと第五代のラジャ・カッシムとの抗争は、史實を傳えたものでなく、ラジャ・カッシムの王位篡奪を正當化するためであると、生田氏は見なし、『明實錄』に見えるマラッカ國王第四代の息力八密息瓦兒弔八沙と第五代の速魯檀無答佛哪沙とは同一人物で、『スジャラ・ムラユ』のラジャ・カッシムに當ると推定されたが、これは從來の通説をくつがえすもので注目し價する。ただ、氏は「息力八密息瓦兒弔八沙」を Śeṭi Parameswara Deva Shah の對音とみなし、「パラメスワラは王女と結婚した身分の低

い男」を意味したと考えておられるが、明朝へわざわざ出向いた彼が自己をどのように卑下するのはおかしい。マラッカの建設者であるパラメスワラに因んで大パラメスワラと稱し、自己の王位を正統化しようとしたのではなからうか。

それはさておき、ヒレスの記述やヘスジャラ・ムラユの記録から見たマラッカ王國の社會—王室・貴族グループと(貿易)商人・外人グループとの分離—や、經濟體制—王室・貴族グループは貿易に従事せず商人・外人に寄生—、それに宗教—回教的規制は上層部に及ばず—の特色については、和田久徳氏が「マラッカ王國の海上貿易」という小論(大航海時代叢書月報第七號)で鋭く指摘されている。

東南アジアはインド文化と中國文化の谷間、或はインド・中國・ヨーロッパ文明の露店と評されることもあるが、ジャワに於けるヒンドゥー文化、マライのイスラム文化の役割を過大視することは危険である。歐米の學者は植民地文化の意義を説くか、或はその意義が稀薄な場合には東南アジア文明の停滞性を強調するかのどちらかである。外來文明の浸透性が皮相であることは、直ちに被影響地域の文化の停滞性につながるであらうか？

ところで、ヒレスはポルトガルの海外發展の絶頂期に於いて既に見られた後年の衰退となるべき現象—軍事力や人材の不足、商館内部の腐敗—をも、この箇所略記している。反面、當時のポルトガル人が抱いていた回教徒に對するヒステリックな惡感情も強く表れている。

以上、甚だ恣意的な紹介、見當外れの批評で誠に申譯ないが、讀者並びに譯者ご一同の寛容を乞う。なお、譯語・譯注で疑問の點を

若干列記させていただく。

第三部第一章注(18)「三尺」↓「三丈」、第四部第一章注(19)「beniaga」↓「beniaga」、第五部第一章頁二七八「蘆蒼」↓「沈香」、同第二章注(14)「Wijaya」↓「Widjaya」、同章注(22)「不刺頭」↓「不刺頭一把」、同章注(36)「Batara Browijaya」↓「Sang praboe Bra-Widjaya」、Aria Damar」↓「Aria Damar」↓「Husein」↓「Hoesen」、カンベル」↓「ニャンベル」、同章注(43)「流落」↓「流居」、同章注(46)「二將」↓「其の二將」、同章注(47)「中國の人ここに來りて搬居し」↓「中國の人ここに來りて搬居するに因りて」、第六部第一章注(1)「Sejarah Melayu」↓「Sejarah Melayu」、同章注(8)「Paramjura」↓「Paramjura」補注十二「頁五七五上段「内に入りて」↓「門に入りて」、同下段「板を鋪かず」↓「板を鋪かず」、頁五七六上段「沙孤」↓「沙孤樹」、荖葦」↓「荖葦葉」、頁五九〇上段「パラメスワラ」↓「イスカンドルシャー」？

本書の寫本が合綴されていた爲に生じた亂丁・落丁・行文の混亂、それに未定稿であることによる表現のまずさは、譯者ご一同に大變なご苦勞をかけたものと思われる。原文に忠實な譯を志された餘り、生硬な文章がかなり目につくが、譯者ご一同の並々ならぬお骨折を深く感謝する。

(中島愼二郎)